

「茶旅」

”こぼればなし“

(20) 台湾 消えていく茶畑

コラムニスト 須賀努



2年ほど前、台湾の梨山に登った。台北から宜蘭經由公共バスで5時間、2500mの高地には茶畑が広がり、景色は良いのだが、連日濃い霧が出て、雨も降っていた。こんな中で晴れ間を見つけては伸びてきた茶の葉を手で摘み、丁寧に茶を仕上げていくのは至難の業。大烏嶺という場所に行った時には、行きは問題なかった山道の路肩が落ち、茶葉を担いで路肩の残った部分を渡り、迎える車に積み込んで何とが茶工場に運んでいる姿も目撃した。1週間前に起きた地震と連日の雨の影響で、土砂崩れも発生していた。高地における茶業とはなんとリスクの高い仕事なのかを痛感した。

そんな大烏嶺の茶畑がなくなっているとの話が駆け巡っている。元々このあたりの土地は実質政府の保有地が多く、土地を借り受けて茶畑を運営している場合、契約期限が来て、更新されなければ、その茶畑はなくなってしまう。日本人から見れば『とても香りの高い台湾を代表する高山茶の畑をつぶすなんて』と非難したくなるが、事はそう簡単でもなさそうだが、茶畑をつぶすのは『土砂崩れなどの危険』だと指摘する向きもあるが、茶樹を植えたことで土砂崩れが本当に起きるのかについては、証拠がないという人もいる。実際茶畑が閉鎖され、茶樹が切られてしまった土地を見たが、その跡には何も植えられておらず、これではむしろ危険が高まったのでは

ないか、と思えてしまう。地元のある人は『土壌の良い梨山の高山茶は価格が上がり過ぎた。同業者から妬まれたのかもしれない』と利権絡みであることを説明してくれた。確かに一時は海拔が高ければ高いほど良い、などと言われ、その希少価値とも相まって、梨山茶の値段は他地域と比べても相当に高い。ただ前述の通り、高山での茶作りにはそれなりのリスクが伴い、まじめな茶業者がぼろ儲けしているようにも見えないのだが。今年も梨山に登ろうかと、中部の街、埔里を訪れた。ここは台湾のちょうど真ん中にあり、落ち着いた街で、一時はロングステイの受け入れ地として、日本でも有名になった場所である。ここに蝶々の収集に来る人もいるなど、自然にも恵まれている。そして1999年には大地震が起き、あたり一帯はかなりの被害を受けたところでもある。たまたま紹介を受けて知り合った

茶業者、葉志遠さんは、茶作りの忙しい中、朝早くから我々を車に乗せて、山道を走ってくれた。梨山に向かう本道からはすぐに逸れ、殆ど車も通らない、細い道を走り出したので不安になった。途中道には虎も出ると言われて驚いた。結局埔里から2時間かけて着いた場所は、林の間に見事な茶園が広がっていた。周囲に20km

には人家はなく、汚染という言葉は全くなかった。まるでお茶の桃源郷という感じだった。最近梨山などにはお茶愛好家が自家用車で訪れるケースが多いが、ここは知っている人以外はとも来られるところではない。残念ながら茶作りは終わっており、電気も通っていないので、お茶は飲めなかったが、ほぼ人が入らない自然環境を存分に楽しんだ。外国人でこの地を訪れたのは我々が二組目だと聞き、その幸運を喜んだ。



台湾の無くなりゆく茶畑

この地は地元の茶業者の間では良久と呼ばれているぞうだ。このオーナーは、梨山茶として売り出せば高値で売れるのだが、敢えて良久茶として売ることこだわっているという。この自然環境はもう台湾にはない光景となり、その本当のよさを知らせたい、という思いが強いらしい。しかし葉さんの言葉に衝撃を受けた。『この茶畑もあと数年でなくなるかもしれない』と。一体なぜ? 『す

でここにも政府の調査が入ってきている。閉鎖は時間の問題なのだ』と悲しそうに話す。地元の事情はよく分からないが、どうしてこんな山の中の、自然環境に恵まれた茶畑をつぶさなければならぬのか、本当に解せない。葉さんは続けて『ここは元々誰にも教えるつもりはなかったのだが、もし無くなってしまうのなら、その前にこの光景を多くの人に知ってもらいたいと思ひ、敢えて案内した』と説明してくれた。何ともやるせない話で声も出なかった。『良久』とは読んで字の如し、良いものが久しくある、という意味ではないのだろうか。高山茶ブームの高値商売に浮かれることもなく、地道に茶を作っている人々に対して、台湾政府は一体どんな見解を持っているのだろうか。良久茶の自然な感じを味わいながら、ふと『本当の価値とは何か』と考へてしまふ。(すが つとむ)